



今月の農家さん

土地と野菜の特性を考える

野洲市野田

小森 真樹さん (41才)



専業農家になって7年目の小森さん。ビニールハウスでハウレンソウやシュンギクなどを育てているほか、毎年秋には郷土野菜の「吉川ごぼう」を収穫しはじめます。

吉川ごぼうは、野洲市吉川の水はけの良い土を活かして約40年前から栽培されており、普通のゴボウより皮が白く、アクや苦みが少ないのが特徴です。

「栽培のきっかけは『高齢化や後継者不足で吉川ごぼうの作付けがなくなるかもしれない』

と聞いた事でした。その土地ならではの野菜が無くなるのはもったいない」と小森さんは話します。

はじめは吉川の農家の方に栽培方法などを教えてもらいながら少しずつ栽培面積を拡大し、今では約30aの畑に作付けしています。

最後に小森さんは「大切なのはその土地に適した野菜を育てる事だと思います。土地の特性を活かした伝統野菜で地域が活気づけば嬉しい」と話します。

営農情報

◆水稲

来年産の水稲栽培に向けた土作りについて

「稲は地力でとる」といわれる通り、水稲を栽培する上で土づくりは、大切な作業のひとつです。土づくりを行うと、登熟向上や稲体の活力維持などの効果があり、米の品質向上・収量増大が期待できます。

また、土作りにはカドミウムの吸収を抑制する効果もあります。土づくり肥料によって土壌のpHが高まることで、カドミウムは植物の根から吸収されにくい状態になるので。

そのため、来年の作付予定地には必ず土づくり肥料（とれ太郎など）を散布し、食の安全を脅かすカドミウムを吸収させないようにしましょう。

稲わらのすきこみについて

ほ場に稲わらをすき込むと、途中で分解されて腐植になり、やわらかく保肥力の高い土壌を作ることができます。

また、稲わらに多く含まれるケイ酸は、稲の茎や葉を硬くして倒伏や病害虫に対する抵抗力を高める効果があり、非常に有用です。

◆大豆

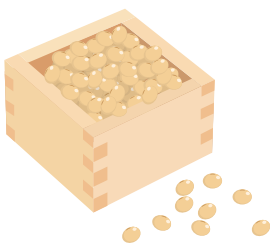
大豆の収穫について

大豆の成熟期は「葉が完全に落葉し、茎の大部分が褐色に変化し、子実が品種特有の色を呈して、莢を振ればカラカラと乾いた音がする時期」です。

汎用コンバインによる収穫適期は、成熟期から一週間以上過ぎ、ほ場での乾燥を促進させて、莢がポキッと折れる頃が目安です。

ただし、十分に乾燥した収穫適期であっても朝露が残っている時間の収穫は、粒が傷つきやすく品質低下の原因になります。天候などにより異なりますが、およそ午前10時以降に、朝露が無くなった事を確認して収穫作業を行きましょう。

また、収穫前にイヌホオズキ等の雑草や青立ち株を除去して、汚損粒が発生しにくいようにしましょう。



稲わらを十分に分解させるため、すき込みはできるだけ年内に行いましょう。